

---

# 俺が世界の主人公

終

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

俺が世界の主人公

### 【Nコード】

N8802Y

### 【作者名】

柊

### 【あらすじ】

自分こそがこの世界の主人公と疑われない主人公が、異世界に飛ばされ頑張る話。

## 俺が世界の主人公

あ、どうも世界の主人公こと佐藤祐樹さとうゆうきです。

別に頭がおかしいわけじゃなくってね、（名前が普通だからって馬鹿にすんなよ）俺のプロフィールを見てもらえば納得だと思っただよ。

成績優秀（学年一位）

眉目秀丽（もてまくってしょうがないね！）

武道の才能（武道系の部活のやつに勝てる）

人徳にも秀でる（普通こんな人間嫌われる）

気もきくし、苦手なものが存在しないどころか、他の人間より劣っているところが存在しない。

まさに万能の才人と呼ぶべき完璧人間。

別にこうなるために何か努力をしているわけでもないのに。

そんな俺の悩みは毎日に刺激がないこと。

それを解消するための唯一といってもいい趣味がゲームである。（

この話題があるおかげで男子に嫌われない）

ファンタジー系のRPGをやってはこんなモンスターと戦ったりする刺激のある毎日過ごしたいなーと思いつつも。

「またひとつ世界を救ってしまった」

つまりはゲームをクリアしたのである。

さて新しいゲームでもやるか と思い、積みゲーの山に手を伸ばす。

「つい冗談で一年なのに生徒会長に立候補したらなれちゃったんだよなー」

そんで忙しかったからゲーム積んじやったんだ。

「マジで刺激がほしいなあ」

異世界で旅とかしたいなあ（できれば勇者希望）

『汝異世界へ渡ることを望むか』

なんだこの頭の中に直接響くような声は。  
ま、まさか！

これは夢にまで見た異世界への召喚か！

きつとこれで望むとか言えば勇者への出世コースまっしぐら！

「望む！」

『よかるう』

瞬間、俺は闇に飲み込まれた。

ん？闇？

闇の中で囁かれた。

『我の名は“…の神”』

それを聞いて俺の意識はなくなった。

目が覚め起き上がる。

下を見ると何やら幾何学的な模様の召喚陣っぽいものが。

はっ、やっぱり俺は異世界へ召喚されたんだ！

となると光の女神さまからのお告げなものがあるはず！

と思ったが何やら周りを見ると騒がしい。

「おお、ついに召喚なされました」

ん？俺のこと？

「あなたこそ……」

ふっ、テンプレどおりだな。

どうせそのあと、あなたこそ伝説の勇者様みたいなことをいうんだ  
ろっ？

「闇の神」に寵愛されし異世界からきた大魔道士となる方ですか？」

へ？

「ええええええ！？」

俺が世界の主人公（後書き）

新シリーズもがんばります！

俺こそ主人公のはずなのに…

なんという事実を発表してくれたんだ司祭の方よ。

まあ考えてみればその予兆のようなものはあったが、納得もできない。

予兆というのは最初っからして光の女神様のなものが来るようすではなかったし。(いきなり闇に覆われた)

納得できないのはなぜそんな大魔道士などというちよつと脇なポジションなんだ、普通のRPGとかだったらストーリーに多大な異変はもたらすがすでに過去の偉人となっていたり、秘密を話してすぐ殺されたりなどなど。

たしかにおいしいポジションではあるが、前の世界では俺こそが世界の主人公という感じだったのになぜここでそのポジション？

「ま、いつか」

俺はただ刺激がほしかったただけだしな。

「で、この世界での俺の役目は？」

「おお、飲み込みが早いようで助かりますな」

まあ心の準備はあったしな。

「勇者を隠れ蓑にし、最終的には魔王を倒してほしいのです」

「勇者を隠れ蓑に？」

ちよつと引つかかるな。

「ここは“闇の神殿”です、おそらくここから離れた所にある“光の神殿”でも勇者が召喚されていることでしょう」

「ならその勇者に任せればいいじゃん」

「実は神殿の奥に“闇の泉”と呼ばれる場所があり、そこにつかるとあなたの力が覚醒します」

急に何を？

「それと同じように、“光の神殿”の奥にも“光の泉”があり、そ

こにつかると勇者の力は覚醒するでしょう」

話をし始めた理由がわからない。

「ですが、勇者が泉につかったとしてもほとんどまともな力は得られないことでしょう」

「どういうことだ？」

「おそらくは勇者が得られるのは他人を引き付けることができる圧倒的なカリスマと小型の魔物などを追い払う程度の聖なる光でしょう」

「なるほど、実際に頑張るのが俺というわけだな」

「はい、なので街中でいきなり魔王を神とする邪教の信者などにメインに襲われるのは勇者です」

「ふむふむ」

歴史の表舞台に立つのが勇者なのはちょっと残念だが、俺の求めるスリリングな生活はできそうだ。

「じゃあ俺は今どうすればいい？」

「この奥の“闇の泉”に入ってください、闇の力の覚醒と“黒の魔導書”が授けられます」

「“黒の魔導書”？」

「それは後で説明するのでとりあえずもらってきてください」

「お、おう」

さすがにこんなことが人生で起こるとは高校生にもなって（本気では）考えていなかったのでドキドキする。

「よっしゃー！」

頬をたたき、気合を入れ先へ進む。

「んーなかなか長いなあ」

いきなり先が見えないほどの長さの通路だった。

……十分後……

「おお、扉だ！」

通路は長く、もう何時の間にか辺りは黒一色の暗い空間になってい



たところに扉があった。

「よし開けるか」

扉はなかなか重く、ギギギギと音を立て開いた。

「おおー」

辺りの暗さになれ、周りが見えるようになり、見渡した扉の先はまさに感嘆の声を洩らすのも無理はない光景だった。

それは辺り一面の黒だった。

実は今までは黒という色に嫌悪感があった。

だがこの黒は不安を煽るようなものではなく、まさに透き通るとでも言えはいいのか、それほどに透明感があった。

とにかく辺りには、泉というよりも湖とでも言ったほうがいいのでは？と思うような透き通る黒があった。

「おっとこれに浸かるんだっけ」

さすがに不安になるので水を少し手ですくってみた。

「な!？」

なんだこれは!この手ですくったものは今まで触ってきた水とは違った。

手を傾けると何かが流れ落ちていく。

確かになにかを触っていた。

冷たくなかったがぬるくもなかった。

つまり温度は感じなかった。

今この手を流れ落ちていくのは水ではなく“何か不思議な力”のように感じた。

「よし」

だがなぜか安全を感じ、覚悟を決めた。

間違いなくただの人間ではなくなるという確証を持って。

足を踏み入れていく。

普通だったらどんどん不安になるところだがなぜか心が澄んでいく。

『汝力を求めるか』

あの時の声だ。

「ああ、もちろんだ」

『まず闇を操る力を与えよう』

泉に満ちる力が流れ込んでくる！

理解した、きつとこの泉に満ちる闇を自分は操ることができるだろう。

『その闇は身を守る最強の盾だが剣にはなりえない』

それも何となくがわかる。

『ブラック・ゲリモワール  
黒の魔導書をやるう』

少し離れた手の届かないぐらいのところに一冊の本が現れた。

闇を使い手元まで持ってくる。

今闇を使ったがおそらくものを動かすならこの程度しかできないだろう。

「ありがたく受け取るよ」

ここに来る時は長かったが、今はこの力がある。

体が闇に包まれた、すぐ闇は解かれその場所は長い通路の入り口だった。

「いやー便利だなあー」

ハマっちゃいそう。

「さて、戻るか」

俺こそ主人公のはずなのに…（後書き）

ちょっと真面目な感じになるのは珍しいです。

俺強えー！

「終わりましたよー」

「おお！お帰りになりましたか」  
結構オーバリアクションだな。

「で、早速だけどこれどうすりゃいいの？」  
黒の魔道書を差し出した。

「それを読めばいいだけです」

「ずいぶんと簡単だなあ」

ま、簡単っていいよね。

「そんじゃちよつくら」

パラパラ っと。

瞬間。

「ぐっ！」

知っているはずのない知識が頭の中を走馬灯のように駆け巡る。

「なん だよこりゃ あ」

思わず膝をつく。

「くらくらすんなあ」

と言いつつもだいぶおさまってきた俺である。

「おそらくそれで魔法などを覚えたはずす」

ん、確かに頭の中にそれらしき知識がある。

「とりあえず軽いのうってください」

んーっと今おれが覚えているのはー

そのー

死霊召喚 論外

その二

マインドコントロール これも論外

その三

周囲2kmから生命力を吸収 ドレインフィールド

その四

隕石を呼び、辺りを荒野に変える究極魔法 メテオスウーム

なんかやばいのばつかだな…

まあ、黒の と銘打つ魔導書だしなあ。

お、イイの発見

ファイアボール

初級魔法みたいだしいいよね。

まずは魔力を集める。(初級魔法だし軽めに)

そして魔法名を宣言し、集めた魔力とともに放つ。(宣言するのは

イメージを固めるため)

「ファイアボール！」

そして、手から放たれたのはメゾ マもびっくりの大火球だった。

「へ？」

ポツカーン

もちろんこんな生易しい音ではなく。

神殿の半分近くが吹き飛んだ。

因みに失敗の原因、集めた魔力多すぎ。

「いくら召喚された選ばれた人でも限度というものがあります！」  
そして説教中…

……二十分後……

「まあ、あなたにも修行の必要があるので、勇者はもう先に王城であいさつを済ませ、修行を始めたようです。あなたも混ざって来なさい、あなたは目立ってはいけないので、王へのあいさつは要りません」

「つかれたー」

「はいわかりました」

俺めつたなことで怒られないから説教なんてひさびさだなあ。

「案内してあげなさい」

司祭はそこらの神官に言った。

「なんかえらそー」

「はいわかりました」

……道中カット……

ここは王城の訓練場。

えーつとさつき教えられた通りに。

「勇者様と同じ世界から従者となるべく召喚された大魔道士見習いの佐藤祐樹です」

俺のあいさつの相手はもちろん勇者のはずなんだが…

「えへへ、そんな畏まんなくていいですよー私は光ひかり 美輝みきです。気

軽にみつきーとか言ってくれてもいいですよ？」

なんかほわほわした雰囲気ひんぎの美少女だった。

「それでは光さんと呼ばせていただきますしょう」

「んーもつと碎けてほしいんだけどなあー」  
さすがに初対面でそれはちよつと。

「ま、いいや訓練の続きがあるからまったねー」  
「大魔道士さま、どんな訓練がよろしいですか？」  
横からいきなり声がしたが、どうやらおれの訓練を担当してくれる  
ようだ。

「うーん」

あの調子だと魔法の微調整はムズそうだなあ。  
頭の中の魔導書をめくる。

お、いい魔法発見、これなら。

「よし組み手をしよう、実戦形式の練習だ」  
「？」

……一時間後……

「くっくっく、はーっはっはっは」

俺は死体の山を周りにつくり高笑いする。（別に死んじやいない）

「弱い、弱すぎる、誰も俺を止められないのか」

俺の武器はナックル、グローブのようなものだ。

この武器にした理由が、空手とボクシングなら神の領域にある自信  
があったからというのと、これなら遠慮せずに使える魔法があった  
からである。

それは三つあり、一つ目が加速魔法、二つ目が身体強化魔法、三つ  
目が武器強化魔法である。

ともあれ今日の訓練時間は終了らしい。

とりあえず手でも洗うか。

## 修行だ修行！

「いやー！朝から気持ちがいいね！」

ここは前回と同じ訓練場。

騎士たちは朝早く訓練を始めるので、もうすでにみんな訓練に入っている。

どうやって昨日の夜を過ごしたのかというと、俺は騎士専用宿舎に泊めてもらった。

「さて、また組み手でもやりますかみなさん！」

「いやー今日は本調子じゃなくってね」

「ちよつと風邪がね」

「まだ死にたくない」

「おっと、早く練習をしなければ」

「持病の癩が！（ちらっ）」

OKわかった。

俺は空気の読める天才だ。

「俺が本気で殴っても壊れないもんある？」

「おそらく壊れないであろうものならありますが」

「じゃあそれ貸して」

……十分後……

「よしセッティング完了！」

瓦割のような感じでセットした。

これは魔法でコーティングした鉄板で、この国でもかなり硬いものなんだって。



そして俺のしたいこととは某バトル漫画で言う“気”のように魔力を使えないかということの実験。

魔法を使うと威力が高すぎて、あえて非効率的なことがしたいと思つて考え付いた。

「さてと」

魔法を使わず、手に魔力だけを込める。

そして拳を振りおろすと同時に魔力を放つ！

「はっ！」

【ガイン！】

接点から衝撃波が生まれる。

【バキン！】

「あーあ砕けちゃったよ」

「そ、そんなバカな」

訓練をいつも見てくれている騎士さんがなんか驚いてる。

「これそんな堅くなかったよ？」

「これは大砲が何発あたっても砕けるはずのないようなものなんですよ？」

「はー」

魔力の直接運用はさすがに弱いかなーって思ったけど案外威力があるらしい。

「あなたはもつと細かい魔力の操作を学んだほうがいいですよ」

あ、やっぱり？俺もそんな気がしてた。

「なのでこれ使ってください」

口ウソクを一本渡された。

「これで何しろと？」

「魔法で火をつけるだけです」

「その程度か、楽勝だぜ！」

むむむー魔力を集めてー

「ファイア！」

【キュボ！】

「ワーオ、キャンプファイアー」

「意味のわからないこと言うより前に反省してください」

「サーセンした」

もう一度渡してもらったロウソクを使い挑戦。

さっきはこれ以上ないくらい魔力小さく入れたしなー

ここはあえての魔力全開！

「はあああああああああ！」

【ズゴゴゴゴ】

「ファイア！」

.....

まあもちろん失敗だったけどね

俺たちの旅はまだまだこれからだ！（前書き）

初のもとも（まとも？）な戦闘シーンあり

俺たちの旅はまだまだこれからだ！

「ふぁー」

なれない野宿に思わずあくびをしてしまった。

もうこの世界に来て一カ月か。

そう！もう旅立ってるんだよ！

それはまだ昨日の話。

……一日前……

「うーん！」

これまでのきつい訓練も終わり、結果そこそこ集中すればガスコンロレベルの火を出せるようになっていた。

それに光とも仲良くなった。

今日はいい天気だ！

窓の外で小鳥はさえずり暖かい日差しがさす。

ここまでいい天気だと呪われてるのでは？という気になる。

【ガチャ】

「サトウさんそろそろ始りますよ」

扉を開けて入ってきたのはいつも訓練を見てくれていた騎士さんだ。名前はアリアって言うらしい。

絶対男だと思ってた奴いるだろ！

因みに始まると言っているのは国を挙げての勇者とその従者のお披露目式である。

表向きにはこの旅の目的は勇者が 火水風地 の聖域に一つずつ眠

る“光の一式”を集め、魔王の封印をすることである。確かに魔王封印には“光の一式”の力が必要なのであながち間違いない。

だが本当の目的は俺に与えられた少数しか知らない密命である。それは勇者とともに聖域を回り、“黒の魔導書”と同じようなものを回収し、最終的な裏の目的とは、魔王を封印するのではなく。

？殺す？

さて、お披露目式でも行くか。

……二時間後……

色々な人達の長ったらしいと俺たちの紹介が終わり、むしろ俺からしたら一番の重要事項である従者の発表である。

「いい人が来るといいんだけどなあー」

「騎士さん達みんないい人だから大丈夫！」

みんなお前にはいい顔するけどな。

確かに心から騎士道精神をたたきこまれているのもたくさんいるがな。

たまににいるんだよ、従者になれるくらいの腕前があり、野心を持つてるのが。

もし聞き分けの悪い奴だったら秘密裏に消す<ことも考えなければな。

「では最後に従者の発表をする」

隣の光は素直に楽しみにしているがこっちは気が気じゃない。

「騎士、アリア・ダスト」

呼ばれた騎士は壇上に登り宣言する。

「この旅で勇者様達に尽くすことを騎士の誇りに誓います」

「よかったあー、アリアか」

あの微妙なローテンションな喋りで確信した。

「知ってるの？」

「ああ、俺の訓練を見てくれた人でな、この旅を一緒に過ごすうえで一番信用に足る人だ」

「考えうる限り最高のケースだ！

「へえーすごい人なんだねー」

これでお披露目式も終わり、この後すぐ旅に出た。

………現在………

と、まあこんなことがあったわけよ。

「じゃあみんな！旅を再開するよー！」

「「おおー」」

光の号令にアリアとローテンションで応じ、歩き出す。

「昨日は魔物に襲われませんでしたか今日はどうですかね」

アリアの発言は明らかにフラグだった。

「祐樹君アリアさん見て！」

街道を何かが五匹ほどうるついていた。

「ゴブリンですね、人ほどの大きさを持つ魔物です、あまり強くは

ないので練習を積む意味で倒してはいかがでしょうか」

「アリアさんが言うのならそうしよっか」

俺たちは群れに近づくと。

【ギユイ？】

ある程度近づいたらこちらに気づいたのか、よく分からない鳴き声を発して武器の棍棒を構え始めた。

「さてと、こちらも」

俺はナツクルをはめた拳を構え、光達は剣を構えた。

「先制！」

光が突っ込み、フォローにアリアが入る。

「やつ、はっ！」

光は正確に相手の攻撃をいなして確実にダメージを与えている。

アリアは流石といったところで、光が経験を積めるように光が戦っているゴブリンには手を出さず周りを制している。

「なら俺も遠慮なしで！」

ゴブリンが襲いかかってきたので魔力をこめたデコピンで棍棒ごと粉碎する。

【ギユガ！】

そんな感じの声を出して街道の横にある森林の木を薙ぎ倒して吹っ飛んでいく。

いやー、よく飛ぶこと。

「一匹目始末完了」

ゴブリン達も流石に怯えている。構わず加速魔法を唱える。

「アクセル！」

速攻で近づき蹴りを首に叩き込む。

【ゴギン！】

そんな音がして二体目も動かなくなった。

「次は三体目！」

喧嘩キックを頭に叩き込む。

頭が吹き飛んだ。

流れるように四体目の胴体に手刀を横一閃させる。

【ズバツ】

胴体の上と下がおさらばする。

同時に光が五体目を仕留め戦闘終了。

因みに、魔物は死ぬと死体が消えます。

「祐樹君すごいですね！」

「いやー、それほどでも」

褒められるとちよつと照れる。

今思うとナツクルつける意味なかったな。

「ま、いつか」

過ぎたことは気にしない主義。

「じゃあ旅を再開しましょう！」

再び歩き出す俺達。

「それにしても」

？光が突然話を始めた。

「私たちの旅はまだまだこれからですね」



俺たちの旅はまだまだこれからだ！（後書き）

ちゃんとまだまだ続きます。

暇…だな…

暇だ…

今何してるかって？

歩いてるんだよ。

まったく、馬車ぐらい用意できなかったのかね。

せっかくだし俺の知ってる限りの世界情勢を軽く語ろうかな。

この世界は巨大な大陸と、その南に巨大な大陸の三分の一くらいの大陸からできており、巨大な大陸のほうはもうすでに二十年ほど前からダイーン王国が支配しており、小さいほうの大陸は魔王が支配している。

そして俺たちは大陸の中央から西に位置する地の聖域に向かおうと思っただけで歩いている途中。

「あー、歩いてばっかで暇だな」

「歩いたほうが健康にいいよ！それにもうすぐ村みたいなのにつくと思うよ」

ふーん。

「あれ？もうすぐだなんでどうやってわかったんだ？」

「勘」

「はあー」

まだまだ歩きそうだなあ。

「じゃあ新魔法の開発でもすっか」

我ながら何の脈絡もない発言だ。

「できるのですか、というよりもどうせ暴発するんじゃないですか」  
「いや、今までの経験を踏まえての発言だ」  
「どうということかって？ふふふ」

「魔力を入れすぎても問題のない魔法を作ればいいんだ！」

「例えばどのようなものを」

反応薄くてつまらながそれはいいとして。

「こつ今までののは爆発するようなものだったからやりすぎると周りに迷惑がかかったわけじゃん？」

「そうなりますね」

「だから内側に圧力がかかるようなものとかどうかな？って考えてるんだと思う？」

「発想は良いですが魔法はイメージを固めることも重要なのでもっとしつかりそのあたりを固めたほうがいいんじゃないでしょうか」

「よしそうと決まったら」

何にしようかなー

やっぱりありそうでない定番の重力魔法とか。

他にはー

俺ドラ エ8のギ スラ シュみたいな感じの魔法かなんかで武器を作り出すみたいなのもいいなあ。

だがそれは後にして前々から考えていたものがまずあるんだが。

「実験台ほしいなーいないかなー」

【グギャー！】

「またゴブリンだよ」

光は嫌そうだが。

「いた！実験台！」

ご都合主義万歳！

俺の新魔法にお任せあれってな。

「ファイアバレット」

開いた掌にビー玉のようなものが出来上がる。

「あ、それきれいだね！」

確かにビー玉の中に炎の揺らめくところはなかなか幻想的だな。

「いやそうじゃなくってね？」

機能性だよ機能性。

「一定以上の衝撃を与えるとこのガラスっぽい膜が碎けて炎が燃えるんだよ」

これなら（あんまり）被害は出ない！（はず）

「一定以上の衝撃ってどのくらい？」

「軽トラがアクセル全開で突っ込んでくるときくらいかな」

「え？それって使いものになるの？」

「ま、見てなっつて」

ファイアバレットを真上に軽く投げる。

「あーらよつと」

落ちてきたところをコイントスの様に上ではなく前に撃ちだす。

【ズガン！】

ガラス状の膜が壊れ解放された炎が相手にむかって直進する。

【グガアアア】

「幅一メートル距離百五十メートルつてとこかな」

改良の余地あり。（威力増加の方向で）

「おかしいよね、軽トラがアクセル全開で突っ込むより威力の高いものうっつたってことだし、ライフル撃つたみたいな音したよ？」

「それに、やはりというような感じですが被害出ましたね」

「細かいことは気にすんなよ、禿げるぞ」

「は、禿げ！？」

「さーて気張ってこー旅の再開だー」

「ちよっと待ってよそれ私のセリフだよー!」

念願の 突っ込み役を 手に入れたぞ

「はぁーつつかれたー」

「もっと元気に歩こうよー」

「光があとちよつとで着くとか言ってからもう三日だぞ」  
あとちよつとだからと自信満々に言われてちよつと期待しながらも  
延々と歩かされ精神的ダメージを負っているこちらの身にもなっ  
てみる。

「やっぱし今日もどこにもつかないそうだなー」

「今度こそあともうちよつとだつてばー」

「そんなことよりもあれを御覧になってください」

アリアが突然指差したほうを見てみる。

見えたのはゴブリン六匹が人を囲んでいる。

この辺ゴブリン多過ぎじゃね？

まあそれは置いといて。

「旅人が魔物に襲われている光景とみた」  
と言うよりかはそうとしか見えない。

「むむむ！勇者として見逃せないですね」

「そっぴゃお前勇者だったな」

「冗談きついねー」

「え？」

「え？」

「……………」

「……………」

「とりあえず近くから様子を見よう」

「そのまま助ければええやん」

さっきのシヨックで光がなんかおかしくなりながら反論してきた。

「ふっ」

だがそんなの決まってるだろ？

「ここぞというタイミングで助けたほうがっこいいからだ（キメ顔）」

ということとで近くの草むらから観察。

「お前らまとめてかかってこいや！」

「あいつ襲われてるくせに威勢がいいな」

「あの武闘家おそらく腕に自信があるのでしょう」

なるほどしばらくは様子見でよさそうだ。

続きを見よう。

【グギャー！】

棍棒を振りかぶって襲いかかるゴブリンに蹴りで応戦する。

「だりゃあ！」

俺から見てもなかなかいい蹴りだと思っただが。

ゴブリンはとっさに棍棒でガード。

威力のこもった蹴りの直撃した棍棒は砕け……

なかった。

むしろ武闘家の方が、

「いったー！すね打っていったー！」

とか言ってる始末。

「あ、ゴブリンが群がってきたよ」

「そうだな、しかも棍棒でたたかれまくってるよ」

「痛い！痛いってば！弱い者いじめは良くないよ！本当に痛いのは俺じゃないよ！君たちの誇りに傷がつくよ！」

なんだ、あいつ。

「ただのバカか」

「流石にもう見てられない！」

「あつ」

飛び出してつちゃった（さりげなくアリアも）

「しゃーねえなあ」

「ハッ！」

【ズバツ】

光がまだ気づいていないゴブリンの背後から一閃でしとめる。  
アリアはサポートに徹する。

一度あいつの本気もみたいものだが。

「死ねっ！」

俺はと言うと技術のかけらも見えない力任せな蹴りで無理やりゴブリンの首をへし折る。

【ゴギヤツ】

残り四匹。

「碎け散れ！」



渾身のストレートで頭をそのままの意味で吹き飛ばす。  
同時に光がもう一匹仕留めたので残り二匹。

「消滅しろっ！」

一匹の頭をつかみアイアンクロ でひねりつぶし最後の二匹に叩きつける。

「ふうっ！すつきり爽快&さわやかさっぱり！」  
良いストレス解消台だ。

「あんたたちすげえな」

起き上った武闘家が感嘆のまなざしを込めて言うてくる。

「何だまだいたのか」

「初対面でそれはひどくね!？」

ほんとに気付かなかった。

「いや、まあ助けられてありがとう。俺の名前はドラゴン・スウ  
イツチお前たちの名前は？」

「俺が佐藤祐樹だ」

「光美輝だよー」

「アリア・ダストです」

「あのさあお前ら旅してるんだろ？」

「まあそういうことになるな」

「そんならさあ、俺を仲間に入れてくんねえか？」

「やだ」

「即答すんなよー！」

なんだごちゃごちゃうるさいやつだ。

「理由を聞いてやるっ」

「いやー俺さあ武闘家見習いでさ、修行の旅に出ようと思って来たわけよ。だがあの有様でね、修行どころか旅だってまともにできない状況でな？」

「確かにひどいな」

「別に辛辣な会いの手求めてないから、それでお前たちなら強いし、おまえたちといれば強くなれる気がするのよ、だから仲間に入れてほしくっつてさ」

「なるほど」

「仲間に入れてもいいよー」

「まじで！」

「おい、光こんなめんどくさそうな奴仲間に加えても意味ないぞ」

「仲間が増えたほうがたのしいよ！」

「だがなあ」

「このパーティーのリーダーは私だよ！」

「そこまで言われちゃあな、そこそこ（盾として）使えそうだしいつか」

「やったぜ！」

新しく仲間を加え旅は再開される。

「やったね！祐樹君仲間が増えたよ！」

俺の五十個は軽く超えている奥義の一つ！

パチパチと焚火の燃える音が聞こえる。

とどのつまりは新入りがきてから町や村には着かなかったということ。

なので今は野宿の準備中。

俺はもう焚火に着火するという任務を果たしているから無問題。

「なあユウキちょっと来てくれないか？」

「別にいいけど」

まだこいつは仲間になって半日くらいなのに前からずっとこのパーティにいたかのような自然さだ。

学校の転入生とかでいるよね、なじむの早い奴。

少し離れた所で

「なあ、俺に技を教えてくださいませんか」

「は？」

何のつもりだこいつ。

「いやいや言わずともわかる、ユウキは名のある武闘家なのだろう」

「まず俺は武闘家ですら……」

「きつと使っている技も秘密の技などであまり人には教えたくないのだろう」

「ないんだが」

こいつ武闘のこととなると人の話聞きやしねえ。

「懇切丁寧に教えてもらおうなどとは思っていないだからこつやっ

てたまに手合わせしてくれないか？」

「えー」

正直めんどいからやりたくない。

こんなことしている暇があったら今すぐ寝たい。

だがメリットもある。

こいつとはこれから先長い先まで一緒に旅をしたいと思います。

そいつが使い物にならないというのはちょっと困る。

「しゃーねえ、稽古をつけてやる存分にうってこい」

「ありがとうございます！」

案外礼儀正しい奴だ。

「いくぜ！」

「いつでもこい」

「はっ！」

あの逆に痛がってた時の蹴りだ。

見切った！

「奥義・龍虎！」

身をかがめて蹴りを避けると同時に力をため、拳を思いきり振り上げドラゴンを殴り飛ばすと同時に放った魔力が龍の形をとってドラゴンへ襲いかかりさらに上へと吹き飛ばす。

「滅牙拳！」

落ちてきたタイミングに合わせて振りおろされた拳から放たれた魔力は虎の形をとってドラゴンに突進して近くの木の幹に叩きつける。

「済まない、やりすぎた」

近くに寄って話しかけてみる。

「いきなり手厳しい、必ず今の技覚えて見せるぜ」

それも済まないがその場のノリでうった多分この先使われないような

技なんだ。

さすがにこれは面と向かって言えないので心の中だけで付け足しておく。

「自分でやっというて何だがそこそこ威力あったと思うんだけど大丈夫か？」

ただの魔物程度だったら余裕で消滅してる。

「それは今コメディーパートだから……ゲフンゲフン」  
わざとらしい咳もあったもんだ。

「俺の唯一の自慢は体が丈夫なことだからな」

ひどいごまかし方だ。

「まあ俺の体は心配するなそろそろ戻るぞ」

生まれたての小鹿の方がまだましなくらいひよこひよこ歩いてた。

「やせ我慢はほどほどにしよう」

我ながら誰に言ってるんだか。

## 初めての旅人らしいこと

「ついに村にたどりついたぞ！」

「もうちよつとだつて言ったでしょ」

喜ぶドラゴンに自慢する光。

「もうちよつとなんて言ってから一体どれだけの月日がたっただろうか…」

光がなまじ希望を持たせてくるものだから余計につらかった。

「そんな大げさな言い方、するほど、時間経ってないよー」

「するほど、はな」

「ところでこの村の名前はなんていうんだ？」

ゲームとかとは違って村の入り口とかに説明してくれる人がいないから分からない。

「どうやらここはエルスト村のようですね」

「さすがアリアだな」

やっぱり仲間に一人こういう何でも知ってる知識人がいると助かるな。

「村の入り口に、ようこそエルスト村へ」と書いた看板が立っていたので」

こいつは案外お茶目なのかもしれない。

そういえば、ゲームとかとは違って、のくだりで思ったことなんだが。

「人がいなさすぎやしないか？」

「やっぱりそう思う？」

こう見えて光もちゃんと状況確認しているようだ。

「こう見えてなんてひどいなー」

心の声を聞くな。

「誰かいればよいのですが」

「そんなことよりもまず村にたどりついたら宿屋の確保だろ！」  
失礼ながら言わせてもらおう。

「ドラゴン、おまえバカに見えて常識を持っていたんだな」

「それひどくね!？」

何を言う。

「俺たちの共通認識のはずなんだがな」

「みんな俺のことそんな目で見てたの？」

振り返ったはいいものの。

光は完ぺきにめがきよどつているし、アリアはすごく自然な動きで  
周囲を確認する動きをしながら目をそらす。

こいつら空気の読める奴らだ。

「みんなひどいよ」

もう子供じゃないのに泣く物じゃないよみっともない。

「さて宿さがしでもするか、宿なら嫌でも人がいるはずだ」

……五分後……

たいして広くもない村なのですぐ見つかった。

俺と光は看板が読めないが看板の形、雰囲気からまるわかりだった。

「おじやましーす」

【ガチャ】

人の家に遊びに来たわけじゃないが、なんとなく言ってしまうのは

俺だけじゃないと信じてる。

「ひいつ」

「うわっ」

入ってきたらいきなり驚かれたのでこっちも驚いてしまった。

「あ、すいませんお客様でしたか」

「そついえばお前ら金もってる？」

二部屋借りて男女で分けようと思っていた矢先のドラゴンの疑問。

「おまえバカだと思っていたけど」

「もうそのくだりはいいよ！」

「なーんだ」

目をきよどらせようと準備していた光の残念そうな言葉。

「あれ？俺つてもういじられ役確定？」

「私はお金持ってないよー」

「私もです」

「俺も持ってな」

「ドラゴンも持ってないだろ？」

必殺、発言つぶし。

「仕方のない奴らだな」

ポケットに手を入れる。

他の奴らにはそう見えることだろう。

この世界に来た日にもらった闇の力のおかげで影の中に収納スペースを作れるようになった。

なのでそこから取り出すだけなのだが色々入っているため時間がかかる。

「これは違う、これも違う、これは秘密兵器、うわー！こんなの出したら俺が世界の王に君臨しちゃっよ」

「ユウキのポケットどうなってんだよ！」

「何の話をしている？はい代金です」



「ちょうどお預かりしました」

「そういえば、あなたの名前は何ですか？」  
宿で働いている人に聞いてみる。

「なんだユウキ、ナンパでもすんのか？」

無視。

「ケル・ネインです」

「じゃあネインさん、このあたりが静まっている理由を教えてくださいませんか」

分かりやすく体がビクツとしたなこの人。

「実は今この村は不定期に魔物が襲ってきており村人達は外に出られないのです」

お決まりの定番といった感じが。

「むむむ、私としては聞き逃せないことだね」

お困りごとですすでに過剰反応してる奴がいるけどな。

問題はここから。

「どのような魔物が襲ってきているんですか？」

「数はたったの一匹です」

「いくら魔物といえども一匹ならどうにかなるのでは」  
アリアの冷静な指摘が炸裂。

「ですが魔物が魔物なもので……」

「もったいぶらないでください」

結構他人に冷たいよね、アリア。

「村を襲っているのは“スライム”なのです」  
スライム？

……

はははははは

笑いが止まらないね。

「何だスライムか」

光も同感だったようだ。

「なあ、みんな拍子抜けだったよな」

そう心から思ってたドラゴンとアリアを振り返った。

だが帰ってきたのは予想と違いすぎる答え。

ドラゴンの足はガタガタと震え、あの表情を崩さないアリアでさえも驚きを隠せていない表情だった。

なんだこの反応は。

「みんなスライムと聞いたとたんにとどうしたんだよ」

「それは明日説明します」

「ああ、俺も今日は休む」

ドラゴンとアリア、二人とも疲れきったような絶望したような顔で部屋に入った。

## 無駄なフラグを立てるもんじゃない

「やっぱりベットはいいな」

村に来た次の日の朝。

もうすでにベットの魔力に取りつかれ気味な俺。

野宿には戻れないかもしれない。

「おいドラゴン起きてつか」  
男女でそれぞれ同じ部屋でドラゴンとは部屋が同じだから話しかける。

「おい起きろー」

返事がない熟睡中のようだ。

「しゃーねーなー」

おもいつきり掛け布団をめくってやった。

「おや？」

もういなかった。

【ガチャ】

「光おはよう」

光がちょうど同時に部屋から出てきたので挨拶をする。

「おっはー」

返しが古かった。

「ねーアリア見た？」

「いや、俺が見ているわけないだろ」

「だよーねー」

「ドラゴンもいなかったし食堂にでもいつてるだろ」

「そだねー」

寝起きの光はいつもにも増して雰囲気が緩い。

「お、やっぱりいた」

予想道理に二人ともいた。

ちよつと空気がおかしかったけどそれはひとまずおいといて。

「まずは腹ごしらえだな」

……二十分後……

ここは引き続き食堂。

アリアが昨日に引き続き説明してくれるようだがドラゴンはお通夜のような雰囲気を漂わせていた。

「ではこの魔物スライムの説明をさせていただきます」

「頼む」

「このスライムという魔物は自然界に発生する体のほとんどを魔力で保った希少な魔物です」

スライムってうじゃうじゃいるものじゃないんだな。

「ゼリー状の体を持ち、切ってバラバラにしても再生し、打撃をして粉々にしても元に戻ります」

「どうやって倒せばいいんだ？」

「ほとんど不死身のようなもので土に埋めるか海に沈めるくらいしか対処法はありません。正直に申し上げてただの一時しのぎです」

「でもやっぱりずつと大丈夫にして村の人を安心させてあげたいよ」

「だが倒す方法がないんじゃない」  
俺たちにも少しお通夜なムードが漂ってきた。

「あと一つだけ確率は限りなく低いですが完全に消滅させる方法があります」

「それは何だ？」

「高名な大魔法道士の使う大魔法クラスの威力をもった魔法で消滅させます」

「そんなことできるわ」

「だったら俺の出番だな」

久しぶりのドラゴンの発言をつぶす。

「…できるのか？お前武闘家だろ」

「俺を誰だと思っている」

俺のことを武闘家だと思っている誤解はあえて解かない。

……二時間後……

「さて作戦も固まったな」

あとは知らないかもしれないがネインさんにスライムの居場所をきこう。

と思ったら。

「皆さん大変です！」

「ネインさん、何があつたんですか？」

「村にスライムが来ました、早く部屋に避難してください！」

「みんな、手間が省けたぜ」

まるで漫画みたいな展開だ。

「みんないくよー！」

「っしやー！」

ドラゴンは絶望していたような顔から一転して気合を入れる。

「やるしかないですね」

アリアの声は静かな覚悟を感じさせる。

光たちが外に飛び出る。

「外は危ないですよ、なぜ隠れないのですか！」

「俺たちはこれからこの村を救う、ネインさんの方が危ないから隠れてください」

無駄にウインクも決める。

何かが落ちた気がした。

「気のせいか」

無駄なことをしている間に光達は戦闘に入っていた。

「よし、ちゃんと作戦の動きができている」

「やつ！はっ！」

光とアリアがスライムを切りつける。

「せいっ！」

スライムが飛びかかってきたらドラゴンが弾き飛ばす。

「と言っても所詮おとりだけだな」

「ふうっ」

息を吐き精神を集中させる。

魔力の入れ過ぎで魔法が暴走するぎりぎりまで魔力を込める。

「ファイアバレット」

つぶやいた瞬間。

「逃げましょう」

「うん、早く逃げないとね」

「よし逃げるか」

物分かりのいい奴らは好きだぜ。

「行くぜ！」

【ズガン！】

撃つと同時に解き放たれた炎の奔流がスライムを飲み込む。自分で見てもすさまじい威力だった。

「やったか？」

おいドラゴンその発言はフラグだ。

「あれをよく見てください」

アリアの指差す先には何かがいた。

「なんか動いてるよ」

おいおい。

「マジかよ」

少し体積が減ったように見えるものスライムさんはまだ「存命のようだった。」

「くそつやりたくなかったんだがな」

「どうしたんだよユウキ」

すこし心配そうに声をかけてくるドラゴン。

だが俺は決断する。

「お前から下がってる」

「そんなことしなくつてもみんなまで戦えばいいじゃん」

「聞こえなかったのか？俺は足手まといだからさがれと言ったんだ」

「なにもそんな言い方ないじゃない！」

「少し抑えてください、サトウさんの言うとおりで下がりましたよ」

アリアは俺の言いたいことが分かったようだ。

「あんなこと言われて引きさがるの？」

「いいえ、きつとこれからサトウさんは私たちを巻き込む危険性のある魔法を使うでしょう、私たちのために言っているのです、引

きさがりましょう」

「いくぜスライム！」

俺はスライムに自分から手を突っ込んだ。

「おいユウキそんなことしたらお前がやられるぞ！」

俺がそんな浅い考えで行動するかよ。

俺の三つ（これからどんどん増える予定）のチート魔法の一つ！

「アブフルース ハンド！」

手が少し明るめの緑色に光る。

それと同時にスライムが見る見るうちにしぼんでいき、消滅した。

「ははっ、やってやったぜ」



無駄なフラグを立てるもんじゃない(後書き)

もっと戦闘シーンを書き込みたいですね。

## 夜逃げ（昼だけど）

「仕留めてやったぜ」

スライムを倒せたことよりもこの魔法を試せて、そのうえ魔法が成功したんだ、そっちの方がうれしい。

「くっくっく、あーはっはっはっは、あっひゃっひゃっひゃっひゃっひゃ  
！」

あまりの嬉しさに高笑いがだんだんランクアップ（悪の方向に）してしまった。

「うおっ！一体どうしたんだユウキ！」

「悪魔にでも取りつかれたのでしょうか」

「祐樹君！気を確かに！」

あまりにもおかしい笑い声をあげてしまったので、勝利を分かち合おうと寄って来たみんなが取り乱したようだ。

「お前ら落ち着け、今のはうれしさのあまり笑ってしまったただけだ」

「とっさにその笑い声が出るのもおかしいはずなんだがな」

「黙れ」

「……………」

「そんなことより今何が起きたのですか？」

俺の有無を言わさぬ口撃とアリアのそんなことより発言でドラゴンはグロッキー！空気を読むことができ、なおかつ素早い対処で人望をこれまで得てきた祐樹の決断やいかに！

「また新しく魔法を開発したんだ」

無視です。はい。

「ところでどういう魔法だったの？」

「なんてことはない単純な魔法だ。手で触れたものの魔力と生命力を吸収するだけ」

「スライムを吸収するとはどれほどの規模なんですか」

「大地に軽く触れれば辺りが死の大地へ早変わりする程度」

とは言っても計算上ではの話だが。

「そんな危険な魔法封印してしまいなさい  
すいませんでした。」

「でもなんで最初から使わなかったの？」

もっともな疑問だ。

「光、世の中にはこんな言葉があることを知っているかい？」

「なんの話？」

余りの関係のなさにびっくりしているが次の一言ですべて理解する  
だろう。

「『物語の進行上の都合』という言葉を」

「だったら仕方ないよね」

分かってくれるか。

やはり少しは戦闘シーンが欲しいだろう。

「ところで話は変わるが面倒事は好きかい？」

一応この質問にも意味はある。

「いきなりだな、例えば？」

「そうだな、ある村にあまり目立ちたくない旅をしている旅人四人組がいるでしょう。だがその四人は余りにもお人好しだったため、その村に訪れた危機を退けました」

「よくありそうな展開だな」

「なるほど」

「なるほどねー」

アリアはもう勘づき光もほとんど分かっているのにドラゴンは正真正銘のバカのようにだ。

「そのため、あまり目立ちたくなかったにも関わらず、英雄やらなんやら担ぎあげられるし、吟遊詩人などの人によってその活躍が伝えられて今後静かな旅ができなくなってしまうような面倒事。これを聞いてみんなはどう思う？面倒事は好きかな？」

「あんまり経験したことないことだしなー、そう言われても……」  
まだ分からののかこいつ。

「今すぐ逃げるべきですね」

「みつからに内に早く行かないと！」

「え？なんでそんな結論が出たの？」

「まあいい、早く逃げるぞ、荷物はもう持つてる」

みんなの荷物を 次元ポケット的な感じで影から引きずり出す。

「そのまま影にしまったまんまでいいよー」

「荷物持っていない旅人なんているか」

「なあなあ、今何したの？手品？地面から物出したように見えただけ」

「目の錯覚だ、気のせいだろ」

うざいからごまかす。

「またベットで寝るのはいつになるかな」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8802y/>

---

俺が世界の主人公

2011年12月29日07時52分発行